

学校 教育 目標	中期経営目 標(カ ン の 数 字 は 経 営 方 針 の 番 号)	短期経営目標	具体的な方策	評価指標	当初	達成状況		分析	改善策	学校関係者評価
						中間評価	最終評価			
かしこく ○教員の 資質向上 (2)		①授業を支える授業規律を身に付けさせる。	○授業開始と終了時のあいさつを学年で統一し、指導する。 ○「発言をするときは、筆を止めて、指名されたら『はい』と返事をし、起立して』発言をさせる。語尾まで、しっかりと一言うことを指導する。 ○児童が発言しているときは「話し方のかきこけこ」「聞き方のあいさつ」を意識させる。 ○休み時間の過ごし方「①次の授業の準備②トイレ・水のみ③教室移動④自分の席で静に待つ」のルールをクラス掲示で全校に指導していく。	A 身に付いた児童が80%以上 B 身に付いた児童が70%以上80%未満 C 身に付いた児童が70%未満	61%	C			長期休業明けの児童の実態に配慮しつつも、繰り返し掲示物を確認させた後、声を掛けたりして指導を続けていく。授業規律を身に付けさせる指導の中でも、「話の聞き方」については、特に丁寧に進める。「児童ができていないことを褒めて認め、価値付けていく指導を繰り返ししながら、授業規律を定着させていく。	
		②学年配当の漢字の読み書きを身に付けた児童を育成する。	○漢字指導の際、成り立ちや使い方、関連して一度に覚えた方がよいものについて教師が意図的に指導し、漢字学習への興味を高めさせる。 ○小テストなどで合格基準を設定したうえで成果確認をし、結果に応じて家庭学習をさせるなど、繰り返し練習させる。 ○朝学習の時間、家庭学習の機会に、復習を取り入れる。	A クラスの8割以上の人数が成果確認問題の合格基準を達成 B クラスの6割以上8割未満の人数が、成果確認問題の合格基準を達成 C 成果確認問題の合格基準を達成した児童が、クラスの6割以下の人数				【臨時休業によるアンケート等未実施のため、中間評価に報告します。】	臨時休業によるアンケート等未実施のため、中間評価に報告します。】	
		③それぞれの学年で学習する計算技能を身に付けた児童を育成する。	○計算技能を身に付けさせる指導をする際、生活場面等の事象を通して計算の必要性をもたせたり、計算の方法や意味理解について説明させたりするなど、教師が意図的に指導し、計算への意欲を高めさせる。 ○小テストなどで合格基準を設定したうえで成果確認をし、結果に応じて家庭学習をさせるなど、繰り返し練習させる。 ○朝学習の時間、家庭学習の機会に、復習を取り入れる。	A クラスの8割以上の人数が成果確認問題の合格基準を達成 B クラスの6割以上8割未満の人数が、成果確認問題の合格基準を達成 C 成果確認問題の合格基準を達成した児童が、クラスの4割以下の人数				臨時休業によるアンケート等未実施のため、中間評価に報告します。】	臨時休業によるアンケート等未実施のため、中間評価に報告します。】	
		④意欲的に学習する児童を育成する。	○「学ぶ価値があり 学びの喜びがわくもの」という視点で教材を吟味・選定したり、地域素材を教材化したりするなど、体験的な活動も重視しながら、教材の精選・開発をしている。 ○学習に粘り強く取り組む姿勢や、学習を調整しようとする態度をほめ、認め、価値付ける。さらに、学習に取り組む姿勢や態度について、適切に指導する。 ○子供同士のコミュニケーションが活発で、よい事はよいと認め、失敗や誤りを温かく見守ることができ、学び合いにかかわりやすい学習の雰囲気づくりに努める。	A 児童の自己評価と、担任のみとり(発言・提出物・ノート・態度等)により、クラスの8割以上の人数が、意欲的に学習に取り組んでいる。 B 児童の自己評価と、担任のみとり(発言・提出物・ノート・態度等)により、クラスの6割以上8割未満の人数が、意欲的に学習に取り組んでいる。 C 児童の自己評価と、担任のみとり(発言・提出物・ノート・態度等)により、クラスで意欲的に学習に取り組んでいる人数が6割以下。	70%	B		今回の見取りでは、担任の見取りのみの結果である。評価の観点である、「学びに向かう姿勢」を踏まえ、各教員の各教科の指導に関して、意図的に工夫している場面があるのだと考えられる。児童は比較的、制限された学習環境ではあるが、前向きに意欲をもって学習に取り組んでいる様子が見える。	教材の精選・開発については引き続きしていく。学習場面では、課題解決について見通しをもたせたり、解決に向けての手段や方法をいくつか提示して、児童に選ばせるなどして、学習を調整して進める態度を引き出す指導を展開していく。子供同士の活発なコミュニケーションや学び合いによる活動では、従来の方法が制限されているが、工夫をした形で、子供同士の活発なコミュニケーションや学び合いの活動を展開し学習意欲の向上に繋げる。学習意欲を向上させるためにも、学び合いにふさわしい集団づくりを、教科横断的に進めていく。	
やさしく ○人権教育の充実 (1) ○道徳教育の充実 (5)		⑤仲間外れや相手の嫌がる言葉遣いなどのいじめをしない児童を育成する。	○児童への生活やいじめアンケートを実施し、聞き取りで丁寧に行い、全職員で予防策・早期発見に努める ○生活指導方針やいじめ・不登校委員会など教職員間で児童の様子をしっかりと把握し、早期対応の徹底を図る。 ○5年生とスクールカウンセラーの全員面談を実施し、心配な児童には改めて個別対応する。 ○年に数回、担任との全員面談の際には、交友関係についても丁寧に関き、いじめにつながるような案件は早期対応を心掛ける。	A 把握から一定の解決まで3週間以上かかっている案件が0 B 把握から一定の解決まで3週間以上かかっている案件が3件未満 C 把握から一定の解決まで3週間以上かかっている案件が3件以上	0件	A		休業明けは様々な面で子供も大人も緊張感が高かった。また、長い自粛により、本来の学校のよさを感じている児童が多く、友達とも良好な関係を築けているのではないかと考える。また、ネット上(SNSや掲示板など)での誹謗中傷が見られないことや、管理職・専科・担任・通級担任といった多くの目で情報共有ができてきている点も七小は評価できる。しかし、過去のいじめを主張し、不登校の原因になっている児童も見られるので今後も注意していく。	今学期の教職員の風通しのよさを維持し、誰もが安心して学級の様子を伝えられるようにしていく。また、必要に応じて、早急にケース会議を開くなど常に素早い対応で、児童にも保護者にも安心感を与えられるようにする。	
		⑥自分を大切にし、自分に自信もてる児童を育成する。	○自尊感情調査を実施し、特に数字の低い児童においてはそれぞれにあった自信のめし方を教職員で共有する。 ○学期に1回の担任による全員面談の際、児童の長所を一人一人伝えることで自己肯定感を高めさせる。 ○特別活動部とり連携により、児童の様々な表現活動を交流する機会を設けたり、縦割り班活動でリーダー学年から下学年を励ましたりするなどして、児童相互がよさを認め合う指導をする。 ○日頃から、保護者と密に連絡を取り合い、児童のよさや、つまずきを共有し、「励ますポイント」を共有して児童に自信をもたせるようにする。 ○教室での様子や授業中の発言には、価値付けをするような褒め言葉を用いて、自己肯定感を高めていく。	A 自己受容評価1点台の児童が全校児童の5%未満 B 自己受容評価1点台の児童が5%以上10%未満 C 自己受容評価1点台の児童が10%以上				臨時休業によるアンケート等未実施のため、中間評価に報告します。】	臨時休業によるアンケート等未実施のため、中間評価に報告します。】	
		⑦すれ違った先生や外部の方に、場に応じた(明るく元気に・一度あいさつした人には黙礼など)挨拶ができる児童を育成する。	○校長講話であいさつに特化した話をする。特に高学年の自覚を促す。 ○生活指導年間目標を重点化し、児童の挨拶の習慣が身に付くよう徹底する。 ○1~4年生、5・6年生の発達段階により、TP0に近づいたあいさつができるように指導する。(例；黙礼、応じ身の時あいさつ) ○教職員が率先して挨拶を児童に行い、模範的な姿を見せる。	A 90%以上の児童が身に付いている B 80%以上90%未満の児童が身に付いている C 身に付いている児童が80%未満				臨時休業によるアンケート等未実施のため、中間評価に報告します。】	臨時休業によるアンケート等未実施のため、中間評価に報告します。】	
げんきよく ○心と体の健康教育の充実 (4)		⑧基礎的な体力の向上に努める児童を育成する。	○感染防止策を講じた運動や遊びを推奨し、短縄月間の取り組みを充実させる。 ○東京都の体力テストの結果を分析し、とくに苦手な種目について、特化した改善への取り組みを実施する。	A 運動や遊び、短縄月間の取り組みに意欲的に取り組んでいる児童が90%以上 B 運動や遊び、短縄月間の取り組みに意欲的に取り組んでいる児童が70%以上90%未満 C 運動や遊び、短縄月間の取り組みに意欲的に取り組んでいる児童が70%未満				臨時休業によるアンケート等未実施のため、中間評価に報告します。】	臨時休業によるアンケート等未実施のため、中間評価に報告します。】	
		⑨好き嫌いをしないで給食を食べる児童を育成する。	○校長講話などで、食についての話をし、残菜減量についての意識啓発をする。 ○発達障害に寄り添って食べる「もぐもぐタイム」などの、具体的な取り組みを実施する。 ○給食指導目標を基に、各学級で声かけをし、残菜減量に向け声かけをする。 ○給食週間を各学期1回設定し、特にその期間は、食への興味を高め、残菜を減らせるような声かけを担当する。	A 給食を自分で食べることができる量に調節し、完食する児童が80%以上 B 給食を自分で食べることができている量に調節し、完食する児童が70%以上80%未満 C 給食を自分で食べることができている量に調節し、完食する児童が70%未満	76%	B		給食センターから届いた「児童生徒の食生活及び健康に関するアンケート調査結果」を見ても、七小の残菜は比較的少なかった。(現5年生対象)残す理由は、好き嫌いよりも、量が多いことを理由に挙げる児童が多かったことから、好き嫌いをせずに残さず食べようとする意識はもっているといえる。	食を大切にす気持ちを学校全体でもち続けられるように、具体的方策として挙げた4点を継続し、コロナ感染予防と両立させながら意識させ続けていく。食欲が増すような献立作りの要望を出す。	

達成状況の指標 各項目の評価指標を参照